

物語からみえる音の世界—外来音楽との勝負—

実際の曲調や奏法がどうだったのか知る術のない古代や中世の音楽へのアプローチとして、関連する物語から、そのありかたを考えていくことも許されるだろうと思う。今回は、琵琶に関する物語を紹介したい。

唐代皇帝太宗の威信をかけて

昔も今も、外国の要人をもてなすために、贅沢な食事と素晴らしい音楽が用意される。しかしながら、今日では、そこで披露された音楽が、国の威信まで左右するようなことは無さそうである。しかしながら、唐代には、以下のような話がある。

太宗の御代（貞観年間 626～649）に、唐の西方の国より一人の琵琶の名手が献上された。一曲を演奏すると、その琵琶の音は力強く鳴り響いた。太宗はいつも夷狄が中国に勝るのを苦々しく思っていた。そこで盛大な宴を開いて、羅黒黒を帳を隔てたところにひかえさせ（胡人が弾く）琵琶を聴かせた。羅黒黒はそれを一度で習い覚えた。太宗は、胡人に「この曲なら、わが宮女でも弾ける」と言って、大琵琶を取って、帳の下で、羅黒黒に奏でさせると、一音も違うことがなかった。胡人は、羅黒黒が宮女だと思ひこみ、驚いて帰っていった。この話を聞いた西方の数十カ国は、唐に降った。（太宗時、西国進一胡、善弾琵琶。作一曲、琵琶絃撥倍轟。上每不欲番人勝中国。乃置酒高会、使羅黒黒隔帷聽之。一遍而得。謂胡人曰此曲吾宮人能之、取大琵琶、遂於帷下、令黒黒弾之、不遺一字。胡人謂是宮女也、驚嘆辞去。西國聞之、降者数十国）
張鷟『朝野僉載』卷五

この話から読み取れることは、唐代初期には、西方の国々の音楽が中国のそれよりも優れていたということである。さらに、西方の国の琵琶は、絃や撥が太く大きく（強く鳴り響く）ことである。また、中国にも西方の琵琶の曲を一度聞いただけで覚えて弾ける能力をもった楽人がいるようになったことも、唐代初期の宮廷音楽のレベルが向上していたことを示す。胡人はこれが宮女だと思ひこんで驚いたとある。宮女は、音楽の専門家ではないので、その宮女でさえ弾きこなせるというのが重要だったのであろう。

四夷楽の変化

上記の物語から窺えることを、歴史書の記述と照らして考えてみたい。まず、毎回夷狄に負けていたことである。それについては隋代に遡って考える必要がある。渡辺信一郎『中国古代の楽制と国家—日本雅楽の源流』（文理閣 2013年）に次のようにいう。

「中国の先聖王が夷狄のために制作するのが四夷楽である」という漢代の四夷楽の理論は、隋唐期にあっては、逆に四夷楽によって中国の天子の音楽が支えられるという皮肉な結果をもたらした。（261頁）

漢代の四夷楽とは、経書である『周礼』春官の鞀鞀氏（ていろうし）がつかさどったとされる音楽で、「東夷は韞、南蛮は任、西戎は株、北狄は禁」と鄭玄の注にある通りである。それが逆になっているというのは、外来音楽が技術面でも内容面でも中国のそれに勝るほど隆盛になったことを意味する。『旧唐書』巻29音楽志によれば、後魏に曹婆羅門が、龜茲の琵琶を商人から得て、世の中にそれを伝え、孫の曹妙達（みょうたつ）が北齊の高洋（文宣帝 在位 550～559）に寵愛され、高洋はつねに胡鼓を撃って曹妙達の琵琶に合わせていたという。その頃から、外来音楽が流入してきたが、北周の武帝が外国人女性を后にして、龜茲（現在のクチャ）・疏勒（カシュガル）・安国（ソグド）・康国（サマルカンド）【現在の地名の特定は、岸辺

成雄『古代シルクロードの音楽』講談社 1982年 107～109頁による】の音楽が大いに長安に集まったと、隋唐に到る過程を記している。それらは隋や唐初に外来音楽を宮廷で行う源となった。中国にはなかったさまざまな楽器や舞踏などが西方諸国から流入してきたのである。『隋書』巻15音楽志によると、隋の煬帝の大業6年（610）に、高昌（トルファン）が、「聖明楽曲」を献上することになった。煬帝はひそかに使者の宿泊所で知音に楽曲を聴かせて、練習させた。献上の段になって、先に隋側が演奏すると、胡人は驚いたという。隋の煬帝も、外国音楽になんとかして勝ちたいと思っていたことは、唐の太宗と同じであった。さて、『旧唐書』音楽志によると、唐代の四夷楽は、東は高麗楽・百濟楽の二国、南は扶南楽・天竺楽・驃国楽の三国、北は北狄楽としてまとめられているのに比して、西は高昌楽・龜茲楽・疏勒楽・安国楽・康国楽の五国と、唐代宮廷音楽に占める重要度が高いことが窺える。唐代初期には、まだ中国宮廷の音楽レベルはそれらの国に及ばなかったようである。太宗がつねに文化的に劣等意識をもっていたことは、歴史書の記述からしても頷ける。

唐代初期の琵琶のレベル

上記の康国楽以外の西方四国に共通している重要楽器のうちで着目したいのが、「琵琶」と「五絃琵琶」である。唐代中期もすぎると、白居易の「五絃弾」（809年）や「琵琶行」（816年）などの作品から、民間の楽人も高いレベルの演奏が可能であったことが推測される。しかしながら、唐代初期においては、どうだったのであろうか。それを知ることは難しいが、冒頭の物語からは、羅黒黒のように琵琶の演奏にすぐれた楽人が宮中にいたことが確認される。さらに、西域から新たな楽曲が、楽人の献上という形で入ってきていたことも注目される。こうして長安に外来の楽人が集められていった。それが唐代宮廷音楽のレベルを向上させたと考えられる。それゆえに、唐代中期には、琵琶は都の音を代表する楽器とまでなっていくのである。

唐代初期における楽譜の存在の有無

唐代中期には、演奏のための楽譜は確実に存在した（拙論「音の伝承—唐代における楽譜と楽人」『中国文学報』第62冊 2001年参照）。唐代初期においては、どうだったのか。『朝野僉載』は、張鷟（658?～722?）によってまとめられた。彼は高宗期から玄宗期、つまり唐代前半を生きた者であり、その記述は、唐代前半のことと捉えてよい。そこで、冒頭の物語のなかの「不遺一字」という表現を考えてみたい。「遺」にはさまざまな意味があるが、「尚書三篇を誦して一字も遺わず」（『魏書』巻82祖瑩伝）と経書の『尚書』を一字も間違えず暗記していたといい、宋代詩人の陸游に「丁巳正月二日雞初鳴、夢に一山寺の鳳山と名づくるに至る。其の尤も勝れる処は味軒と曰う。予、為に詩を賦す。既に覚めて一字も遺わず」（『劍南詩稿』巻35）と、夢で鳳山という名の寺で詩をつくったが、覚めてもそれを一字も違えることがなかったと題する詩がある。どれも経書や詩篇などを一字も間違えず記憶しているという意味で使用されているようだ。冒頭の物語では、音の一つも間違えずに記憶していたと解釈するのが妥当のようである。もしかしたら、唐初に献上された楽曲には歌詞が付されていて、それに合わせて音が配されていたのかもしれない。先の煬帝に献上された「聖明楽曲」と題された高昌からの献上曲には、題名に相応しい歌詞が付けられていた可能性もありそうだ。楽しい想像がどんどん膨らんでいく。たかが物語、されど物語、唐代音楽のありようを物語がいくばくか伝えてくれる。